

大浦むかし話

文／西道了昌・村上善作

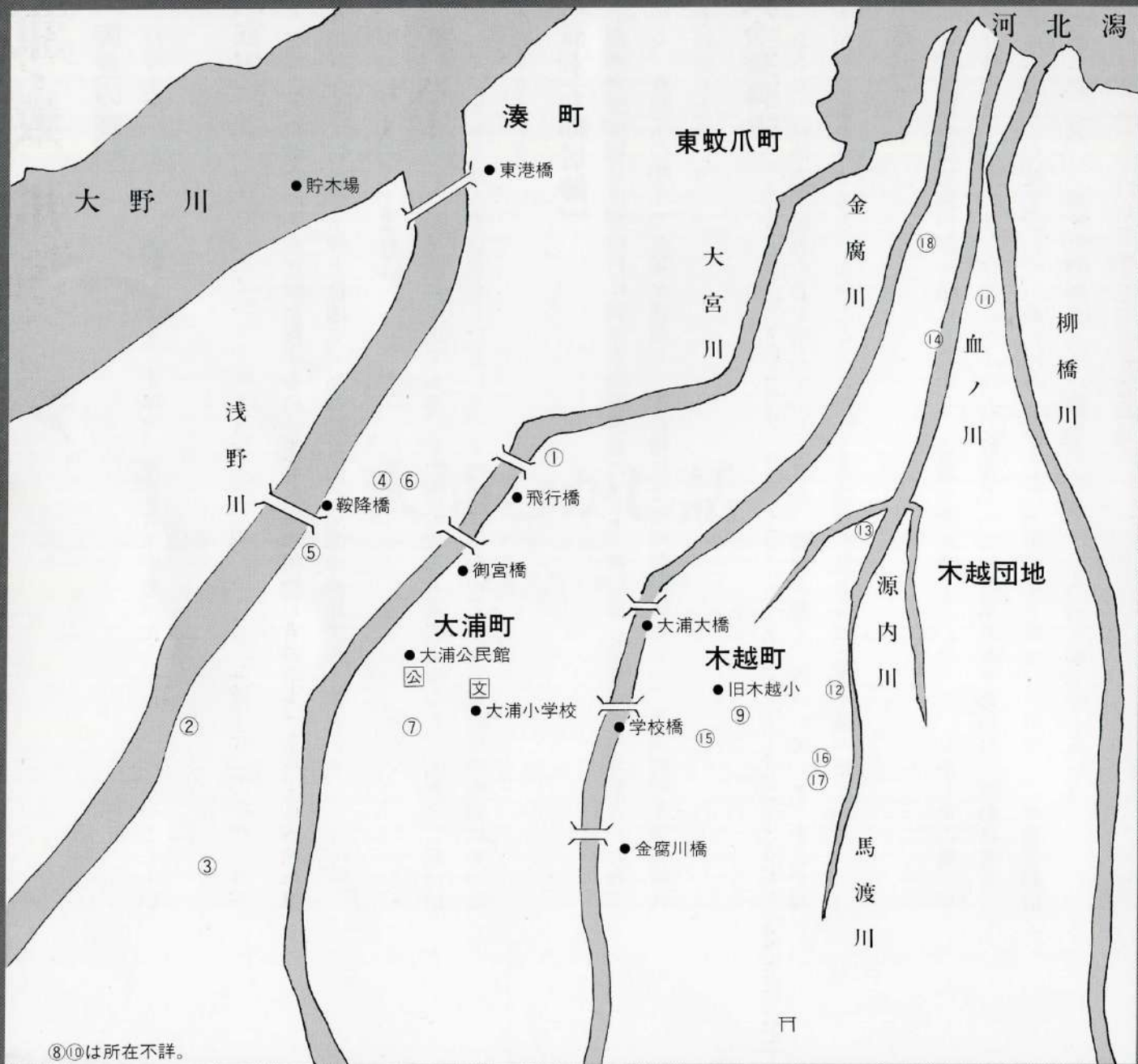
郷土の歴史

浅野川・金腐川が河北潟に注ぐデルタ地帯の低湿地に広がる大浦校下は、昭和四十年頃までは灌漑を兼ねる水路があちらこちらに貫通し、川舟が行き来するクリークの風情を残す水郷地帯であった。

その三角州には、東蚊爪・大浦・木越などの村落が点在していて、川と深く関わりあいながら、独自の生活を営んできた土地の顔や表情がある。

そして、刻み込んでいる土地のにおい、そこに培われた文化の伝統や年輪は、往古から人々に伝統や伝承として受け継がれ、この土地の風土や生活にますます思いを馳せさせてくれるのである。

- ① 御倉の腰
- ② 宮田
- ③ おっちょのつまり
- ④ 高木五郎居跡
- ⑤ 金鞍降り
- ⑥ 赤浜
- ⑦ 天狗のタモの木
- ⑧ 中大浦村
- ⑨ 五色八重梅
- ⑩ 蔵屋敷
- ⑪ 藤右衛門八千歩
- ⑫ 釜の口
- ⑬ 助右衛門切
- ⑭ 血の川
- ⑮ 大男の足跡
- ⑯ 小便川
- ⑰ ながたぐろの金馬
- ⑱ 大浦ぐろの提燈火



⑧⑩は所在不詳。

東蚊爪

〔御倉の腰〕

村の北端にあって、地積およそ一千坪で、往昔倉庫があったと伝える。うらのこしという。

〔宮田〕

村端より三町余にある宮田と称する約一千七百坪の田地。その中央にある広さ百坪の森林は、かつて村の産土神と社地で、当時は宮田の全部は森林であったという。

〔おちちよのつまり〕

昔、おちよという娘が奉公に出ており、その奉公先の若者に恋をした。しかし、恋は結ばれず、おちよは入水自殺をしたという。その地は現在の北寺町、東蚊爪の中間にあった水たまりという。

〔高木五郎居跡〕

高木五郎は鞍月庄割出村に居する高桑備後の子で、館紺屋（染物屋）の元祖といわれている。東蚊爪の郷土で近郷を押領し、赤浜神社は彼の祈願所といい、千田村の牛頭天皇社を再建したという。

〔金鞍降り〕

ある日、村民達が競馬の宴を営んでいたところ、騎具が無く、なげいていた。そこで神主が神に祈り拝すると、たちどころに空中より金鞍が乱れるほど多く降ったという。

〔赤浜〕

昔、大陸の異民族が海を越えて渡来し、辺域を脅かすようになった。しかしその時、やじりは石をくだけ、ほこは天に飛ぶほどの怒濤さかまく神風が吹き荒れた。賊船は沈み、紅血は黒ずんだ波と変わり、砂浜は赤い色をした丹砂に塗り染まったので、この地を赤浜と称した。又、一説には神事として、競馬会があり、赤馬場と転じたともいう。

大浦

〔天狗のタモの木〕

早川家の玄関前に繁る樹齢数百年のタモの木には、天狗が棲みついているという。付近の入江から千田村の入江まで一足でまたいだという。今も傍らに祠がある。



〔中大浦村〕

明応九年の室町幕府奉行人奉書に「倉月庄内中大浦村」と初見され、天文十三年までは中大浦村の記述が見える。しかし、天文二十一年の書状からは、上・中・下と三村あったものが大浦一村となった。上・下の大浦村はどのような村であったのだろうか。

絵●手塚敦磨

Illustration: Atsumaro Tezuka

木越

〔五色八重梅〕

本願寺第八世蓮如上人が木越村に逗留の際、上人に帰依した道休に、上人は自分のつく梅の杖を倒植した。するとその後、この梅は花と実が同時につき、かつ、白・紅・薄紅・青・黄の五色の花が咲き誇り、枝からは下向きに咲くという八重梅に育った。寛永三年、藩主前田綱紀はその奇談を聞いて、株を分けて城中に植えたが植えつかず、やはり寺に戻そうということになり、梅の木は再び福千寺に帰り、株は二株になった。享和二年、同寺十四代林往の描いた五色梅の掛軸が今も伝わっている。現在も蓮如忌の頃、この梅は白・紅・薄紅の三色が咲き、訪れる人の目を楽しませている。福千寺を霊梅山という由来でもある。

〔蔵屋敷〕

村の北方にある蔵屋敷という所には、昔、米蔵があったという。火災にあい、焼けた米が地中に埋もれており、その焼米三、四十粒は今も福千寺に保存されているという。

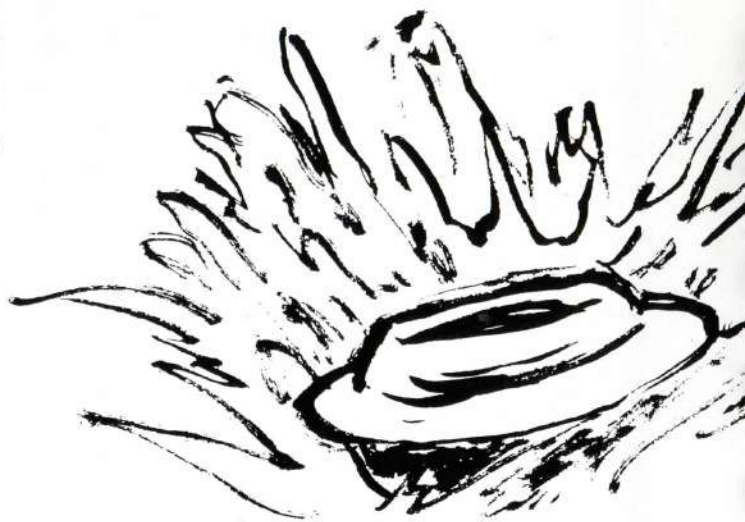
〔藤右衛門八千歩〕

藤右衛門なる有力者が河北潟縁を新田開発した八千歩の地積が字名として残っている。藤右衛門は検地の際、自らの地積を広め私腹を肥したので殺害されたという。今でも、その亡霊が地積を守るため、雨の日、その付近をさ迷うといわれる。

〔釜の口〕

藤右衛門の家に一人の下婢があり、河辺で釜を洗い、家に帰ろうと布でおおったところ釜は音響を発して水中に埋没した。そこを釜の口という。





〔助右衛門切〕

天正八年、木越一向一揆で光徳寺が落城したのは、佐久間盛政に内通していた大浦村の助右衛門が光徳寺を囲む壕の堤防を打ち破り決壊させたためだという。村内に残る助右衛門切の地名由来がそうである。

〔血の川〕

光徳寺・光淋寺・光専寺の所謂、三光の旧跡付近に狐山という山があり、そこに棲息していた大蛇を殺した際、鮮血が流れ出て、血の川と称するようになった。一説に一向一揆で討ち死にした兵士達の血が染まったからとも言われている。

〔大男の足跡〕

「光淋寺の跡は今の田の中となり、ここに大人の足跡あり」と『三州奇談』に記され、木越の田んぼに大男の足跡があったとされる。長さ九尺、幅四尺という巨大なもので、土は落ち窪み、草は一筋も出なかったそうである。北国三足跡として、能美郡の山入波佐谷の足跡、越中俱利迦羅山の打越しの足跡と並び有名である。

〔小便川〕

大男の足跡に付属して、その巨人が木越と宮腰（金石町）をひとまたぎして立小便をしたところ、その跡が流れて川となり、ションベン川と名づけられ、大正初期の耕地整理までは残っていたという。

〔ながたぐろの金馬〕

ながたぐろ——、今の柳橋川にのこるお話。

毎年大晦日の晩になると、ながたぐろを上流に向かってつっ走ってくる裸馬があった。この裸馬に飛びつき、尾っぽの毛一本でもよいから触れると、金運に恵まれ大金持ちになれるという。このことから、ながたぐろを走る裸馬のことを「金馬かねま」というようになった。

この金馬の正体は、昔、白尾の三郎兵衛という豪商が、船に乗って香々の首長へ金銀財宝を貢ぎ物として献上する途中、大場の佐那武神社付近で暴風雨にあった。船は財宝もろとも水底深く沈んでしまったが、沈んだ財宝が、神馬・金馬となって駆るのだという。

〔大浦ぐろの提燈火〕

大浦ぐろ——、今の金腐川にのこるお話。

毎晩、九時、十時頃になると、ちょうど人が提燈を腰にぶら下げたくらいの高さに、つつつ、つつつと人が歩く速さよりも少し速く、河北潟の方へ向かって大浦ぐろを通う燈火が見えたという。燈火は人が近づくとびしゃっと消えてしまい、その正体を見た者がいない。

これは千田の卒塔場そとばにある、松の根元の洞ほらに棲む化け物のしわざであったといわれている。またもう一説には、大浦ぐろで餌をあさる化け鷺の頂頭部が、夜になると赤々と燈火のように光るからだともいわれている。

あとがき

水の風土が暮らしに根づいた大浦校下。四季折々のこまやかな風情は、河北潟に注ぎこむ川と共に流れ、人々の生活も変化をみせている。

ふるさとのたたずまい。それは、この地に息づく人々にとって、貴重な文化であり、共感を深める心の世界であろう。

クリークのある大浦校下に住む人々の生活を写真を通して読みとりたい、そして、後世の人々に伝え続けたいというのが、この写真集「ふるさと水の郷」の主旨です。あえて古い写真を収集することなく、昭和六十年代初頭大浦校下のドキュメントとしました。

限られたページ数の中、どれもこれもカットしたくない写真が多く、選択には胸が痛む思いでした。

出版にあたり、能登印刷・出版部の上陽子氏には、全面的にお世話になりました。厚く感謝申しあげます。

写真集「ふるさと水の郷」編集委員

太田 治郎	大西 光衛
小川 祥夫	影山 清徹
角 渥之	川端 政治
田川 努	西道 了昌
東 茂為	平井 長栄
広田行太朗	舟本 正
前川 雅	松田 元伸
宮崎 孝	村上 純矩
村上 善作	室住長次郎
森重 一穂	

(五十音順)

写真集 ふるさと水の郷

発行 昭和六十三年二月十日

発行者 金沢市大浦公民館

金沢市大浦町ヲ七

電話(〇七六二)三八一五二七一

編集 写真集「ふるさと水の郷」編集委員会

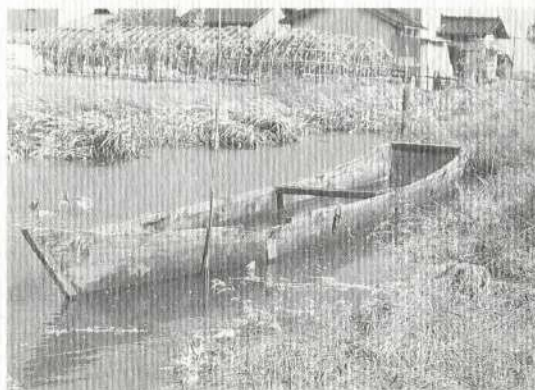
企画・製作 能登印刷・出版部

金沢市高岡町五―十四

電話(〇七六二)二二―四五九五

印刷 能登印刷株式会社

装丁 右澤康之



Photographs for one's native place, a water's country.

写真集●ふるさと水の郷：金沢市大浦公民館